

# 二本松市の指定文化財

11

## 市指定 『観音寺の力士像』

五月町に所在する観音寺の本堂廊下の隅柱上にある四体の力士像で、像高はいずれも約七〇cmを測ります。

この本堂は、かつて東和地域の治陸寺にあった護摩堂で、明治九年(一八七〇)ころに観音寺が譲り受けて、移築されたといわれています。

棟札によると、護摩堂は元文四年(一七三九)に建立されたと思われ、力士像も当時組み込まれた彫刻であると判断できます。その様相は極めて軽妙洒脱であり、奈良興福寺



の康弁作による天燈鬼・龍燈鬼を思わせます。尾垂木にまたがる力士が玉眼を入れた大きな眼を見開き、下腹部に下着をつけ、力一杯両手、あるいは片手で軒を支える構造で、隅柱を飾る建造物の一部ともなっています。

神社・仏閣は江戸時代以降、特に隅柱の木鼻などに大きな象頭や獅子を飾りました。この力士もそれに当たりますが、当寺のような卓抜な例は珍しく、昭和五十五年(一九八〇)有形文化財「彫刻」に指定されました。

## 市指定 『磨崖供養塔(夫婦岩)』

鎌倉時代に卒塔婆(石塔)の一種として発生した供養塔で、西新殿字宮ノ下地内に二基並び建っていて、夫婦岩とも称されています。

右側は高さ二・三m、最大幅六七cm、左側は高さ二・二

m、最大幅五六cmで、いずれも花崗岩の自然石を利用しています。

右側の碑面中央部には阿弥陀(キリーク)の種子(梵字)とその下に接するように地藏菩薩(カ)の種子が一字ずつ、さらに下に「往生極楽」の文字が刻まれています。



左側の碑面中央部には大きく大日如来(ア)の種子と、その下に「十方世界」「嘉元三年六月五日」「撰取不捨敬白」の三行が刻まれていて、建立年代は嘉元三年(一一三〇)であることが分かります。

市内で確認されている石造塔婆の数は極めて少なく、本市の中世時代の仏教文化を考える上で貴重なものです。平成十三年、史跡として指定されました。

## 市指定 『木造 大日如来坐像』

戸沢の愛蔵寺に安置されている総高九四cm、像高六九cm、光背最大幅七五cmの仏像です。

大日如来の形姿は他の如来と異なり、菩薩の形をとるのが通例ですが、本像は智拳印(手と指の組み合せで示す印相の一種)をとる金剛界大日如来と呼ばれるものです。

髪は髻を高く結び、上部で束ね、中央部分は毛筋を縦に刻み、彩色しています。その外側は、それぞれ二つに分け束ねて垂れ下げてあります。地髪は毛筋を丹念に彫り込み、宝冠をのせています。目は玉眼で半眼に開き、目尻は上がり、口は小さく上下



唇ともやや厚い感を受けま

す。条帛は、やや幅広に左肩から右腋下にかかっています。腕には臂釧、腕釧を付け、足は結跏趺坐(座禅の形)を組んでいます。

寺の縁起によると、永禄年間(一五五八〜一五七〇)に火災に遭い堂宇は全焼し、天正元年(一五七三)に再建されたものの、その後再びすべてを焼失しています。そして宝暦五年(一七五五)に現在地に再々建されました。

本像の造立年代は什宝物調べによると、寛延元年(一七四八)で、仏師は京都室町の鈴木浄感・民部の二人であることがわかります。平成十五年、有形文化財「彫刻」に指定されました。